北斗句会（9月）選句

宮下ひかる

特選

NO.３９　日ざかりやほっとひといき横になり

この炎天酷暑続き、熱射病が気がかり、動くに動けずじっと我慢し、家で横になるよりしようがないの心境。　尤も、小生は、木陰を探し歩き、微風に吹かれて草の上で寝転がる。これぞ今の老後の悠々自適。

選

NO.２　　肩へ来て別れの沙汰や秋の蝉

死の直前の蝉に、「別れの沙汰」と解するやさしさは、嬉しい仏心かな。

NO.１８　落ち蝉に指を触れると飛び跳ねる

分かりつつも、頑張れと気使いの現れ、触れて発奮させるのは微笑ましい。

NO.１３　コロナ禍を鳴きつくそうと秋の蝉

うるさい蝉の鳴き声も、コロナ禍を軽減してくれていると解する心の　温かさが嬉しいな。

NO.２６　柿食ふやころころ笑ふ妻のいて

愛妻を見守る様が、食べる柿がころころとおいしく感じ取れて、温かくも涼し気げなり。

田中資凡

特選

NO.06　向日葵の正眼のまま枯れにけり

真っすぐに立つ枯れゆく向日葵に、老いゆく男の生き様を連想したというのだろうか。正眼のままに、この措辞に、作者の心の在りようを感じ、共感を覚える句だ。

選

NO.19 歩の狭き老いに片陰譲る老い

歩幅の狭まった老人に片陰を譲る吾も又老人なり、老いと老いの間に生まれたささやかな労りの情がよい。

NO.23 硫黄島に果てし御魂や銀河濃し

硫黄島に在って散っていった多くの将兵を思うにつけ、天空の銀河は一段と濃く映ったというのだ。

NO.32 この墓は誰が継ぐのか墓洗ふ

お盆に墓参りをする度に、誰もがふと思う一種の寂寥感か、上五中七の措辞にそれが如実に表現されている。

NO.41 虹渉り彼の訪れし国浮かぶ

虹のかなたに過去に訪ねた国のことがふと浮かんだというのだ。叙情溢れる句だ。

森田光彦

特選

NO. ２３　硫黄島に果てし御魂や銀河濃し

海自在職中に、硫黄島の壕を見学したが大変な暑さであった。その時聞いた話であるが、暑い壕の中で、水の残っている一升罎を真中に４体の遺骨が放射状に整然としていたそうである。これを見た米軍は日本軍の士気の高さに驚愕したという。栗林中将以下約 2 万の将兵に頭が下がる思いである。合掌。英霊たちが空から日本の國を見守ってくれているように思う。季語の「銀河濃し」が利いています。

選

NO.　４　鈴虫や言ひたきことを言ひそびれ

鈴虫、松虫で「承元の法難」を思い出しました。「触らぬ神に祟りなし」か。意味深な句ですね。

NO. １２　暗闇に恋の尾を引く蛍かな

蛍の乱舞を「恋の尾を引く」と観察された作者の詩情に脱帽です。初恋の思い出？あるいは老いらくの恋？

NO. １９　歩の狭き老いに片蔭譲る老い

老々介護。身につまされる話。せめて譲る側でありたい。

NO. ３４　螻蛄鳴くやひとり夕餉のサーロイン

螻蛄はすかんぴんに通ず。リッチな夕餉の対比が面白い。
「悠々自適、我関せず焉」か。あやかりたい老後ではある。

山縣秀雄

特選

No.1. 齧り付き味はひ尽くす里の柿

古里の慣れ親しんだ柿を中七の「味はひ尽くす」が絶妙な表現で良い。

選

No.9　コロナ禍の野辺の送りや法師蝉

コロナ禍のお葬式で法師蝉の声がより哀しみを誘っている。

No.24　踏み込めばすっと消えいる虫時雨

虫時雨は近づくと不思議と鳴かなくなる実感があり、季語と合っている。

No.26　柿食ふやころころ笑ふ妻のいて

中七が幸せ一杯の微笑ましい夫婦像を表現しており良い。

No.36　月々の 聲聴く句会秋扇

正に俳句は月々の聲と思われ、季語「秋扇」がぴったりである。

太田黒幸風

特選

NO、６　向日葵の正眼のまま枯れにけり

向日葵が正眼のまま倒れけりとはまことに面白い表現。

諧味と発想が素晴らしい。

選

ＮＯ，２　肩へ来て別れの沙汰や秋の蝉

蝉がたまたま肩にとまったのを別れの挨拶に来たと表現したことが面白い。

ＮＯ　３　虫探す少年の目の輝けり

老年の句には珍しい少年の清々しさが目に付く秀句。

ＮＯ、１９　歩の狭き老いに片陰譲る老い

老老介護ではないがお年寄りのお互いの気使いが現実的に良く表現されている。

ＮＯ、３７　切り分けし白桃光る瑠璃の皿

冷えた桃が瑠璃色の皿に盛ってあるのが美味しそう。

藤田紀潮選

特選

NO.36 月々の聲聴く句会秋扇

「句会」を修飾する「月々の聲聴く」の措辞が素晴らしい。漢字への気配りは句会のレベルの高さをも感じさせる。「秋扇」は作者が密かに心を寄せる女人の存在を暗示。

選

NO.3　虫探す少年の目の輝けり

男の子には虫への関心強く、虫探しには目が輝く。自身の少年期への郷愁も。

NO.4　鈴虫や言ひたきことを言ひそびれ

鈴虫の音に聞きほれ、言いたいことを言いそびれた。誰にでも思い当たる日常の景。

NO.9　コロナ禍の野辺の送りや法師蝉

コロナの三密対策などから、弔いは家族葬が主流で質素、様変わりの感を否めない。出棺のおり、法師蝉の声が一層切なく聴こえる。

NO.26 柿食ふやころころ笑ふ妻のいて

仲睦まじい夫婦の景。「ころころ」のオノパトペは「ころ柿（干し柿）」にも通じる。

大崎石州

特選

NO.9　　コロナ禍の野辺の送りや法師蟬

ご冥福をお祈りします。

選

NO.12　　暗闇に恋の尾を引く螢かな

中七の表現が面白い。夏の句なのが残念・。

NO.19　　歩の狭き老いに片陰譲る老い

外出のたびに私もやっていること・。これまた、夏の句なのが残念・。

NO.22　　柿食うやころころ笑う妻のいて

何時までも、お幸せに・・。

NO.34　　螻蛄鳴くや一人夕餉のサーロイン

サーロインを食っているとはいえ、そこはかとなく哀愁が漂う・。

大森康正

特選

NO.37　切り分けし白桃光る瑠璃の皿

「光る」「瑠璃」により瑞々しい綺麗な景となった。

選

NO.06　向日葵の正眼のまま枯れにけり

「正眼」言われてみれば頷ける。感心の一言。

NO.09　コロナ禍の野辺の送りや法師蝉

コロナ禍、秋の季節感、静かなひっそりとした、葬儀の雰囲気が窺える。法師蝉の取り合わせが良い。

NO.23　硫黄島に果てし御魂や銀河濃し

同島を訪れた際、言いようのない圧迫感に、込み上げるものがあった。「銀河濃し」により、島での過去のすべての出来事が、浄化され慰められる気持ちがする。

NO.40　うみ柿に見透かされたる下心

相手も自分を見ていることに気付いたときの心境。「他人の振り見て、我が振り・・・・・」の諧味あり。

吉岡誠山

特選

NO.２６　柿喰ふやころころ笑う妻がいて

家庭融和の基本は奥さんが笑うことであり、そうありたい。

選

NO.９　コロナ禍の野辺の送りや法師蝉

コロナ禍で多くの人を、奉仕ゼミの鳴き声で送らざるを得なかった。許せ。

NO.２３　硫黄島に果てし御霊や銀河濃し

硫黄島で多くの将兵が亡くなったが、その御霊を安らかであれと改めて祈りたい。

NO.３２　この墓は誰が継ぐのか墓洗う

この墓は誰が継ぐにしても、田舎にこのまま残すか、今住む近所に持ってくるか大変な問題がある。

竹内雲泉選

特選

NO.04　鈴虫や言ひたきことを言ひそびれ

この句、季語が動くかと思いましたが・・・。鈴虫の特性を考えるとまことに素晴らしい句です。鈴虫の雄は、交尾をして死んで亡骸を雌に食べさせます。言いたいことがあったでしょうに。

選

NO.06　向日葵の正眼のまま枯れにけり

盛夏、誇り高く咲いていた向日葵。盛りの時期が過ぎ、枯れた姿をふと見ると気合の入った姿で枯れていた。自分もかくありたいとの作者の気持ちが伝わります。

NO.24　踏み込めばすつと消えいる虫時雨

草むらの虫。足を草むらに一歩踏み入れたら、いままで騒がしく鳴いていた虫の音が止み静かになった。「すつと」で、その情景がよく現われていて素晴らしいです。

NO.28　噴水を四方へ跳ばすつむじ風

噴水は、涼しさをもたらします。噴水に「つむじ風」があたり、四方に水飛沫を蹴散らした様子が目に浮かびます。一段と涼しさが増します。「飛ばす」でも良かったのではないでしょうか？

NO.40　うみ柿に見透かされたる下心

「下心」を熟柿に（私をとって食べようとしていると）見透かされた？そうでは無くて、もっと別な悪気のあった作者。その悪気を柿に察せられたような気がする。そんな気持ちの句でしょうか。そこが良いと思います。

長池豆陽

特選

№26　柿食ふやころころ笑ふ妻のいて

楽しそうに二人して柿を食べている平凡な夫婦の姿。だがその安らぎの姿は長年の努力で築いてきた婦唱夫随の絆の賜か。円満の秘訣ここにあり。

選

№ 4　鈴虫や言ひたきことを言ひそびれ

ふとした音や声で時が止まったり、事象が途切れることはよくあるが、鈴虫の音なら実害も小さかろう。切り口絶妙。

№24　踏み込めばすつと消えいる虫時雨

近くに寄るだけでもかなりの範囲で瞬時に鳴きやむ虫たち、きっと優れた情報伝達手段を持つ歩哨がいるのだろう。

№30　理事会の知恵浮かばざる夏の果

そこにいるだけでも苦痛なことがあるのに、会議は空回りで一向に進展せず暑さだけが倍加する苦労の様子が見える。

№40　うみ柿に見透かされたる下心

熟柿のみならず、軒先の葡萄、庭先の蜜柑など適期と思われるのに収穫されずこちらがじりじりした思いに駆られることがある。同じ下心と自問自答。